

カラーズ

1話「マスターミーつけた」

円形状のフロアの中には、たくさんの人がいた。

僕の叔父だか何だかが、大層な賞というのをもらったということで、その授賞式が開かれたのだ。僕はそれに参加した一人だが、僕の親族は多いので、あまり関心はなかった。

フロアには立食用のテーブルがいくつも並んでいて、それを囲うように人だかりが出来ている。その中でも一番大きな人だかりは、受賞した叔父・・・ではなく、その奥さん、つまり僕からすると叔母に当る人で、とてつもなくケバイ服装をして、悪い意味で一番目立っていた。その添え物のように隣で背を丸くしているのが叔父。どっちが主役なんだかわからない。

だいたい僕は人込みというのが嫌いなんだ。熱いというよりも蒸す。もし、父さん達の代理ということでなければ絶対ここには来なかった。本当は代理として出席してくれと父さんに頼まれた時も断ろうと思ったんだ。けど、「・・・さんのお嬢さんも来るんですって」父さんの隣でなんとか僕を社交界慣れさせようとする母さんが、少しでも僕に興味を持たすように囁いた。

それでまあ、今ここにいるんだけど・・・。

下心と言うと、あれなのだけれど、もう何年も会っていない従兄弟、兼、幼馴染（異性）に会いたいと思うのは、決してスケベ心からではなく、純粹に会いたいという気持ちが働いたからで、やましい気持ちじゃないというのは声を大にして言いたい。

というわけで、僕の目的はただ一つ。

親族の中で唯一仲の良い、もう何年も会っていない同い年の従姉妹に会うことだった。

(キリカのやつは成長しただろうか?)

子供の頃、見た彼女はずいぶん発育が遅れているように見えた。僕より背も低かったし、ずいぶん大人しい性格だったのを覚えている。

そんな彼女のことをずっと記憶に留めていたのは、笑顔がかわいかったからだ。花のような笑顔というべきだろうか。僕の前で、彼女はよく笑った。周りの大人は彼女が笑うこと自体が珍しいと言い、いやでも、僕とキリカが仲がいいと決め付けた。実際、僕も仲がいいとは思っていたのだけれど、大人たちにそれを言われると、なんだかからかわれているようで、子供ながらに嫌だった。キリカと距離を置いたのもそんなのが理由だった気がする。

そういうわけで、キリカに会うのは大分久しぶりなのだ。

でも、結局、この日、僕はキリカに会うことはできなかった。

フロアの中央辺りを一通り探したところで、キリカは見当たらず、入口付近を探そうかと歩き始めた時に、それは起こった。

入口の反対の方から、大きな爆発音が鳴り、何処からか辺りに色の着いた煙が立ち込め始めた。黒くはないその煙を見て、僕はこの騒ぎが人為的なものと理解するに至り、キリカの身が心配になった。

最近、貴族を誘拐して身代金をせしめるという事件が相次いでいて、こういう騒ぎに便乗して起きる気がしたからだ。まして、幼い頃のキリカを思いやると、その不安は倍増

した。

煙の量が増え始めると、周りの人間もこれは尋常ではないと思ったようで、入り口の方に避難を始めた。僕もキリカがそっちの方にはいるのではないかと、向かおうとすると。

「キャアアアアア」

入り口付近に着くと、女性の悲鳴が聞こえて皆がそちらを振り返った。そして、ドサッと人が倒れるような音がした。入り口には赤と青の綺麗な衣装を着た背の低い二人組が立っていて、それを囲うように人垣が出来ている。

何故、人垣が出来ているか？

それは二人の足元に倒れた警備員から広がっていく血で理解に至る。ここは危険だと、早く逃げなければと、脳が警鐘を上げる。だけど、それよりキリカは無事なのかということが頭をよぎった。

「キリカ」

すでに周りは混乱の中にあった、それでも幼馴染を探すが、声はその混乱にかき消される。やがて、後ろから避難してくる人の群れが、人垣を壊し始めるが、二人は微動だにしなかった。一人は微笑さえ称えているように見える。

そして、そんな人の群れを嘲笑うかのように、惨劇は開始された。

「アオ、そっちは任せたわよ」

赤い服を着た少女が冷静な声でもう一方の中性的な少年？ に声を掛ける。

少年はコクンと小さく頷くと、群れなす人を一瞥した。

青い服の少年の姿が一步前に出ると、ほんの瞬きの間、煙に巻かれたように消える。それと同時にゴキリという骨の鳴る嫌な音がして、入口に殺到していた人の群れが瞬く間に消えた。

「アオ、今日も絶好調じゃない。じゃあ私も始めましょうか」

今度は赤い服を着た少女がクスリと笑って、踊るように前が出る。動き易いように前の開かれたスカートがダンスのように舞う。その光景に見とれた瞬間、白刃が横に一閃、輝いた。

赤い液体が噴水のように上がる。それで逃げ惑う人の群れはようやく、このフロアの本当の異常に気が付いた。

入口から人々の悲鳴が上がる。こっちは危険だと叫び声が出始めたが、動き始めた人の流れは容易に変わることはなかった。僕もその流れに巻き込まれていく。力のない僕ではそれに抗うことは出来なかった。その間も惨劇は繰り返される。背の低い二人の少年少女に一方的に殺害されていく大人たち。

フロアには煙が充満しつつあって、少年たちの足元は見えないが、あそこにはたくさんの遺体と血溜まりが出来ているはずだ。

「アオ、お客様が来たわよ」

一方的な惨劇が一段落したところで、赤い服の少女が笑みを浮かべながら、フロアの中央を見上げた。その声に合わせて、青い服の少年も動きを止める。

フロアの中央に、煙の中から黒いスーツを着た屈強な男たちが姿を現した。

「お前たち、カラースのものだな」

黒服たちの中央にいた男が少女たちに声を掛ける。

「あーら、そう見えるからしら」

赤い服の少女は髪をかき上げながら、挑発的な視線をしている。

「それ以外、ここに侵入する奴などいないだろう。まあ、カラーズでなかったとしても、これだけの騒ぎを起こしたのだ。それ相応の代償は払ってもらうぞ」

「アハハハ、怖いねアオ。代償だって、あなた払える？」

青い服の少年は無言のまま首を横に振る。

「だって、お・じ・さ・ん。私たちそんなの払えないし、なにより、払う気もないし」

赤い服の少女は、半眼で黒服に微笑を浮かべる、明らかに相手を見下している。

「それに、おじさん私の好みじゃないから、さっさと死んじゃって」

その声と同時に、赤い服の少女と、青い服の少年がフロアの中央へ躍り出す。対するは、黒服の男、6名。その異様な光景の中、僕の立場でなら黒服を応援しなければならぬのに、何故か僕は少年と少女を瞬きすることもなく見つめていた。

金属が交叉するような音がフロアの中央に響く。

そんな中、赤い服の少女は戦いを楽しんでいた。

「アハハハハ、おじさんもう年なんじゃない。てんで歯ごたえがないよ」

黒服たちは警棒のような武器を手に、少女を取り囲むように追い詰めようとするが、それは逆に少女の思惑に嵌まっている様でもあった。それは、僕の位置からは良く見える。少女が多人数を相手にしている間に、青い服の少年が一人ずつ確実に仕留めているからだ。

フロアの中央より正面側、すなわち僕の方に、少年は立っていた。その姿は肖像画であるかのように、微動だにしないまま相手を見下ろしている。少年は一見武器と呼べるようなものを手にしていないが、その手には黒く光る鉄製のグローブが輝いていた。

本来、打撃武器のグローブの特徴は一撃必重。武器の重さと、その形状によって威力を発揮する。黒く重量のあるように思えるグローブは、少年が軽々と扱っているとそれはただの手袋のように軽く見える。しかし、黒服が叩かれるたびに発する呻き声は、悲痛で、苦く。それはやはりグローブは相応の重量があるのだと、僕は解釈に至った。

だから、少年はその細い体躯で、骨も軋むような重量の武器を、軽々と扱うほどの怪力だと思える。

骨が碎ける音が聞こえて、静かに二人目の黒服が倒れた。少年は何も見していない虚空の目で、黒服が倒れていく様を見下ろしている。

その目があまりに虚無で、白くも黒くもないその瞳が、まるで僕の方を見ているようで、なのにそれを怖いとも思わず、ただ啞然と僕は見ていた。

「くそ、増援を呼べ」

その様子を見て、リーダー格の黒服が叫び声を上げる。

「あーら、最初から頭数に入れてないような人なんか、呼んでも私たちと戦うことなんて出来るのかしら」

余裕なのか、口に手を当てて笑う少女。そんな余裕を見せられれば増員したところで、形勢は変わらないように思える。

それで、黒服たちは防御にまわったのか、方陣を組むと明らかに時間稼ぎを始めた。

「私たちにそんなの無意味よ。アオ、この六人殺っちゃえば、後は雑魚だから、さっさとやっちゃいましょう」

「わかった」

アオと呼ばれた少年はうなずくと、傍にいた三人目の首の骨を砕いた。そして、その死体をぞんざいに放り投げる。それがこっちに飛んでくる。僕の目の前にその死体がどさりと落ちると、僕とアオと呼ばれる少年の目が合った。

僕は今まで煙で見えなかったその姿を始めて直視して、驚いた。

キリカに酷似している      そう思ったからだ。

少年は今まで殺害対象以外、無視していたのに、僕と目が合うと、こちらへ歩き始めた。

「ひっ」

今まで、恐怖の対象でなかった少年に初めて恐ろしさを感じた。

これだけ、人が死んでいるのに、僕は今まで自分が死ぬことなど考えていなかった。今思うと、それはひどく愚かなことだった。

「あなた、誰？」

少年の口から出た声は、少女の声色そのもので、僕はこの時初めて、目の前の少年が女の子だという事に気が付いた。

「あなたは誰？」

少女は同じ言葉を呟いた。背筋を冷たい汗が流れていく。そして、僕はゴクリと唾を嚙下した。

「僕に聞いているの？」

「そう、あなたに聞いているの」

「僕は、シアン」と自分の名前を正直に口にした。

「そう、いい名前ね」

そう言うと、青い少女は踵を返して、僕のことなどお構い無しに、戦闘へと戻ろうとする。だが、僕は

「君は、君はなんて名前」

と、振り絞るように声を出して少女を引き止めた。

すると、青い少女は足を止めて振り返る。そして、ただ一言、

「アオ」

と呟いた。その時、何故か僕はキリカだと答えて欲しかった自分に気がついた。

フロアの中央では赤い少女が踊っていた。いや、本当に踊っているわけではなく、そう形容するほど楽しそうに戦闘をしていた。

アオが僕と話している間に増員された黒服は十名。さっきより煙が晴れてきたので、その戦いの様相がかなり見えるようになってきたのだが、赤い服の少女は合計十三名を相手に互角以上の戦いをしていた。

彼女は短い銀色のナイフを持っている。相手の警棒の長さとは比べるとその刃渡りは半分に満たない。なのに、彼女はそれで大人を相手に優勢に戦いを進めているのだ。

圧倒的な人数で戦いを進める黒服に、一切ひるむことのない赤い服の少女。



彼女は多人数を相手にしたときに、最大の力を発揮するらしい。

その理由も外から見てるとよくわかった。速いのだ、圧倒的な速さが彼女の武器なのだろう。

警棒が振り上げられてから、振り下げられるまでの数秒の間に、彼女はその残撃より先に、それをかいくぐって切りつける。それによる黒服たちの体に刻まれた傷は、すでに無数になっていた。

「ねえ、まだやるー？」

全ての者を傷つけて、それでいて誰一人殺すことなく、少女は満面の笑みを浮かべてそう言った。

黒服たちはその言葉の意味を理解していた。やると答えても、否と答えても、自分たちに待つのは「死」だと。

「ごめん、遅くなった」

「もう、おそーい。一人、相手に何分かかっているのよ」

戦いの最中だというのに、赤い少女は腰に手を当てて、怒ってるポーズをとる。

「くそう、なめやがって」

増援で来た黒服の男が、赤い少女に襲い掛かる。

「バカ、待て」

リーダー格の男の制止を聞かず、襲い掛かった男は、体のあちこちの骨をありえない方向に歪め、あさっての方向に吹き飛んだ。

「アハハハ、ほらね、アオ。こんなポーズとるのなんて誘いに決まっているのに、そん

なこともわからないのよ。増援なんて言っても、いてもいなくてもいいクズよね。ほんと、さっさと死んじゃえばいいのに」

「アカ、戦いになるといたぶるのはよくない癖」

「あれ、めーずらし、アオが戦いの最中に必要なこと以外話すなんて」

「いいから、さっさと終わらせよう」

「はーい、先生の言うとおりにしまーす。じゃあ、あなたたち覚悟はーい？」

黒服たちは絶望していた。体格も人数も全て自分たちの方が優っていたはずなのに、何故？ そう思ったかどうかの合間に、今宵最後の殺戮は開始された。

ひゅー、ひゅー。破れた肺から息がこぼれる音がする。

ゴボッと口から血が吹き出す。

胸には白刃のナイフが一刺し。

辺りには、無残に死んでいる同輩たちの亡骸が無念という目をしていた。

「おじさん、さっきはたいしたことないって言っちゃったけど、おじさんはいい線いってたかな」

アカと呼ばれた赤い服の少女は、さらに力を込めてナイフを突き刺すと、浴びた返り血を拭いもせずそう笑った。

リーダー格の男は「オ、オ、オ」と言葉にならない声を上げて、もう一度、ゴボりと血を吹き出して脱力した。

「アオ、そっちは終わった？」

「うん、これで最後」

アオは、既に倒れている黒服の背骨を砕くと、ゆっくりとアカの方を振り返った。

「さーて、殺しまくっちゃったけど、目当ての人はいますかしらねえ」

「アカは目的と手段を履き違えるからダメ」

「もう、アオは厳しいな。でも私は手段（殺し）のために目的（仕事）をしてるんだから仕方ないでしょう？」

アカは、殺すという言葉を楽しそうに使う。

もう僕は彼女たちの視界に入っていないだろうけど、遠くで聞こえるその声に僕は畏怖した。

フロアの中央には、アオと、アカのただ二人が生存していた。

そして、煙が完全に晴れる。血化粧を浴びていた、アカがその血を拭う。

それで見えたアカの素顔に僕は驚いた。

「キリカ」

アオとアカは全然違う。雰囲気もおそらく性格も、なのに僕の記憶の中にあるキリカという人物と比較すると、二人とも似ていた。

アオは、その容貌が。

アカは、その雰囲気が。

二人を足して、二で割ることが出来たら、僕の知っているキリカになるのではないかと思うくらい。

「ねえ、アオ。あそこにいる子、さっき話してた子よね」

「うん、シアンって言う名前らしい」

「ふーん、あなたが必要なこと以外話すのって、ほんっと珍しいわよね。明日は雨？

それとも雪？」

「天気予報は雨らしい」

「もう、この子は。そういう揶揄じゃない。わかれー、わかってー」

アカはアオの口の両端を掴むと、うにーと広げた。その様は、まるで歳の近い姉妹のようだ。

「アフア、ファフン、ファノフォファフェアフェノフォ」

「え、何？」

「ファファラ、ファノフォファ、フォフフェキノフォ」

「うん、もう。手、放すからちゃんとしゃべって」

アカは、掴んでいた手をさっと放した。

「多分、あの子がそう」

「そうって何が？」

「あの子が、目的の子」

「えっ？　・・・あんまり格好よくないけど」

「元々、格好いいなんて情報なかった。それはアカが勝手に言ってただけ」

「まあ、そりゃそうだけどさ。記憶がないからって、数年ぶりの再会なんだし、劇的にいきたくないじゃない。あんな風に、ポケーっと突っ立ってる子がそうだとは思わないでしょう？」

「でも、こんな死体だらけの場所に、逃げもしないのはすごい」

「ああ、そういう解釈もあるのね。けど、怖くて逃げられなかっただけだと思うけど」

「うん、そういう考えもある」

「じゃあ、とりあえず迎えに行きましょうか。私たちのマスターを」

フロアの中央から二人の少女が降りてくる。

一人は、空よりも青い、スカイブルーの瞳をした少女。

一人は、紅よりも赤い、クリムゾンの唇をした少女。

ここから見る二人の姿は、絵の中の妖精のように現実と隔絶したものに感じられる。そ

の二人が、僕の眼前で静止すると、アカは恭しく、

「マスター、お迎えに上がりました」

と膝を屈し。アオもそれに倣ってこうべを垂れる。

「マスター？」

辺りを見回しても生きている人間は僕しかいない。僕は二人が誰と話しているのか理解できなかった。

「そう、マスター。私たちカラーズの頭領にして、世界の支配者（になる予定）」

「誰が？」

「はあ？ あなた以外ここにいる人間なんていないじゃない」

「僕？」

「そう、あなた。えっと、シアンだっけ、いっしょに来てもらうわよ」

アオが、アカを肘でつつく。

「何よアオ」

「シアンじゃなくて、シアン様」

「もう、そんなこと気にしないわよねー、シ・ア・ン」

僕は何がなんだかわからなくて、唾然としていた。アカはそんな僕のことがお気に召さないのか言葉を続ける。

「もう、いいい？ あなたは私たちのマスターになったの、だから、これからカラーズの本拠に来てもらいます。いい？ OK？」

「いや、ちょっと待って、君たちが誰か僕は知らないし、そもそもカラーズなんてものがわからないし・・・」

「私はアカ、こっちはアオ。文字通り色をコードネームにしているの、だから、カラーズ。これでOK？」

全然、OKじゃない。

「アカ、今は説明より、ここを早く出ないと」

「うーんそれもそうね、さっきみたいな連中なら相手に出来るけど、銃器を持った連中が出てきたらアウトだもんね。そうと決まったら、ほら、しゃきっと立つ。男の子」

アカに無理矢理立たせられ、腰をバシッと叩かれる。それでよろつくのだから、男として情けない。

「ん」

とアオが手を差し伸べる。

僕が思わず手を繋ぐと、

「シアン、行くよ」

とアカも手を繋いでくる。

そして、二人は走り出し、それに引かれるように僕も走り出した。

まだ何もかもが動き出す前、そして、全てが始まる時、僕と、青赤の少女は始まりの光へ駆け出した。

あとがき

各話ごとにあとがきを書くのもどうかと思うのですが、この作品は単発で、伏線はいくつか張ったものの、それを拾う気などさらさらないので、ちょっとづつ書いていくことにします。

一応、ヒロインと思しきキャラは三人います。

キリカ、アカ、アオの三人なのですが、キリカは登場していない(というか登場するかどうかすらわからない)ので、ヒロインの座はアカとアオが争っていくことになりませんが、個人的にはアカの方が好きです。逆境でもカラカラと笑ってられる異性は好ましいです。(というか、私自身がその場の雰囲気とか無視して笑ってしまうタイプなので)

まあ、のんびりと行く予定ですので、皆様から意見などいただけましたら、どしどし取り入れていこうと思ってます。(というか、話の全貌は全然決まっておらせぬので)

ま、そんな感じで、第一話終了にございます。お読みいただき、ありがとうございました。